

2018年度研究成果発表会シンポジウム

理論と実践の往還を問い直す

基調提案	授業実践探究コース	佐長 健司 教授
登壇者	授業実践探究コース	岡 陽子 教授
	子ども支援探究コース	下田 芳幸 准教授
	教育経営探究コース	中島 秀明 教授
司 会	教育経営探究コース	上野 景三 教授

日時 2019年2月14日(木)10時15分～11時45分
場所 佐賀県教育センター

【上野】みなさん、おはようございます。年度末のお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。昨年も教育センターで研究発表会をさせていただいたのですが、今年は研究発表会に加えて、午前中にシンポジウムを計画いたしました。計画したのは、佐賀大学の教職大学院でこれまで取り組んできたことの成果について県内の関係者の方に広く知っていただきたいという願いと、シンポでご意見を頂く中で教職大学院の充実を図っていきたく考えたからです。今回も佐賀県教育センターの小田部所長をはじめ、皆様のご協力を頂いていることに感謝を申し上げたいと思います。いつもありがとうございます。

今回の企画の趣旨ですが、「理論と実践の往還を問い直す」と掲げさせていただきました。この「理論と実践の往還」とは教職大学院のキーワードなのですが、この点について議論を深めていきたいと考えています。この言葉はキャッチフレーズのように使われるのですが、これに関する議論はどれだけ深まっているのでしょうか。例えば、アメリカの経営学者ピーター・ドラッカーは、「実践無き理論は空虚である。理論無き実践は無謀である」と述べています。ではこの言葉を学校現場に落とし込んで考えてみると、現場で理屈を言う先生は「この先生、頭でっかちね」と周りから言われたりします。では一方で実践が大事だという先生は経験主義に陥りがちだと言うこともできるでしょう。そういう状況から導き出される結論は「いろいろ議論はあるだろうが、理論も実践もどちらも大事だ」ということになりがちです。しかし、そこで立ち止まってしまっていないだろうか、ということです。さらに議論を深める必要があるのではないか、というのが今回の企画の趣旨です。つまり、実践と理論の関係というものをどのように考えていくのか、「往還」という言葉に込められた意味とは何だろうかということを深めていきたいと考えています。

そこで、最初に基調提案を頂くのは佐長健司先生です。20分間の基調提案を頂きます。その後、それぞれのコースからご報告していただきます。岡先生、下田先生、中島先生です。よろしく願いいたします。それでは、最初に佐長先生から基調提案をいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

【佐長】皆さんこんにちは。佐長です。今日はパワーポイントを資料として使い提案をしたいと思えます。私が発表する題目は、「教職大学院カリキュラムにおける理論と実践の往還についての考察ー正統的周辺参加の理論を足場としてー」です。まず、目的は「理論と実践の往還」とは何かということにつ

いて、明らかにしたいということです。そのために、大きく 3 つのことを話します。最初に、「理論」、「実践」とは何かということについて明確にしたいと思います。次に、正統的周辺参加の概念をお話します。最後に正統的周辺参加の概念を使って、「理論と実践の往還」とはどういうものかということをお話します。結論から言えば、「周辺性の回復」、実践の熟達を一旦括弧に入れて、もう一度、理論的に違った見方で実践を再度始めるというのが理論と実践の往還になるだろうということを申し上げたいと思います。

では最初に理論、実践についてお話します。理論も実践も日常的に使われる言葉ですが、明確に区別しておかなければならない。理論とは何か、理論とは思考である。実践とは何か、実践とは活動である。思考と活動という違いがあるということです。理論は思考であって、普遍性を志向します。普遍性を思考し、一般化して、概念を生む。概念とは見方でもあります。ですから、理論で語るということは、いつでも、どこでも、誰でも、こうなんだということを語るということになります。学校教育の理論ということ言えば、教育実践についてそれを一般化して、思考し、表現する。そして概念ということからすれば、それは見方ということになります。私だけの理論というものはありえません。できるだけ、一般化され、そして普遍性の高いものほど優れた理論だということになります。特に理科系では、非常にはっきりしています。例えば、アインシュタインの相対性理論、ニュートンの万有引力の法則などです。リンゴが落ちてくることと、月が落ちてこないことを同時に説明できる。これが理論です。しかし、学校教育の場合、物理学のような普遍性を求めるのは難しいでしょうが、それでも、どの教室でも、どの学校でも実践が説明できる、これが理論になります。

その一方で、実践は何かというと、実践は活動であり、特殊性を志向し、個性的な事実、「いつでも、どこでも、誰でも」というのが理論ですが、「今、ここで、私とあなたが」というのが実践です。学校教育で言えば、特定の学校の特定の教室において、特定の教師と子どもたちによって、二度とない一回限りの活動が実践になってきます。ですから、理論と実践の関係というのは、対立・緊張関係にあると見た方が良いと思います。思考と活動、見方と事実、これは一般性を求めることと、特殊性を求めることというところにおいて、理論と実践は対立し、緊張関係にあると捉えた方が、これらの関係は明確になると思います。

実践について学ぶということは、熟達に向かうということです。熟達するとはどういうことかということ、例えば学部の教育実習生を見るとよくわかります。教育実習に行った実習生は、授業中の発問をどうするのか、板書をどうするのかなどを一生懸命準備して授業に臨みます。ところが、ベテランの教員は教室に入ったらずぐに授業を始めることができる。発問をどうしようかとか、板書をどうしようかなど、まったく考えない。これが熟達です。つまり、熟達していくということは、考えないで、実践的な知識が体に浸み込んできて身体知となって、自然に動いていくということです。しかし、初心者は一生懸命考えます。ですから、実践について学んでいくということは熟達していくことであり、熟達していくことは考えなくていいということです。考えなくていいとはどういうことかということ、非主題化するということです。知識や技能を身体化していき、子どもと一体となって授業が進んでいく。こういう状態が熟達していくということです。ですから、熟達とは対象を主題化しないし、自己をも主題化しないと配布資料には書いています。

一方、理論について学ぶと実践の見え方を変えます。一般化の視点から捉え直して、熟達を括弧に入れ保留し、活動対象を主題化します。今やっている実践はこれでいいのか、教師としての自分の在り方はこれでいいのか、もっと優れた教師になるにはどうすればいいのかというように、自分をも主題化していくことをやります。だから、実践的に熟達に向かうと主題化しない、考えない、考えてはい

けない。その一方で理論とは思考することであり、熟達にストップをかけて、その場に立ち止まり考えるということです。だから、理論と実践は全く異なるものであり、そこには対立する場合、緊張関係が生じる場合があるということです。

今日、私は「正統的周辺参加」に基づいて、「理論と実践の往還」について考えてみたいと思います。正統的周辺参加は一般的な学習理論です。レイブとウェンガーは人類学者で、人間の学習・知性がどういうものであるのか、文化や社会は歴史や伝統からどのような影響を受けているのかを、徒弟制の研究から状況的学習というふうに一般学習論をつくっていくわけですね。非常に面白いのは、先ほど、理論は普遍性を求めるということを述べましたが、一般性のレベルが高いほど、優れた理論だと考えられるわけです。これは、物理学の世界なんかでは特にはっきりしている。ニュートンよりもアインシュタインの方が優れているのは、圧倒的にアインシュタインの相対性理論の方が説明する力が強い、一般化が強いということ。アインシュタインも、最後は「神はサイコロを振らない」といったと言われていますけれども、ミクロの量子力学とマクロの相対性理論、これを統一するような理論を作ろうとして失敗したというふうに言われていますね。そこまではいかなくとも、なぜレイブとウェンガーなのかというと、正統的周辺参加の理論は、ユカタン半島で伝統的な生活をしているマヤ族や、アメリカの高等学校で教えられている物理の学習についての分析、それから、断酒中のアルコール依存者がどういうふうに進んでいくのかを分析している。つまり、時代や社会、文化を限定することなく、学習を分析して一般化することができるような理論だといえるからです。だから、非常に高いレベルで一般化しているということで、この「正統的周辺参加」の理論を中心に考えています。しかし、最近はちょっと深みが足りないとも感じているので、ハイデガーの「世界内存在」理論なんかも加えて考えてみたいとも思っています。

「正統的周辺参加」の理論がどのようなものかということ、学習の一般論であって、普遍的な学習のあり方を論じているわけですが、それは「学習は共同体への参加なんだ」といっています。学校教育でいえば子ども達も教師も学校に参加していく、そして、共同体・学校をつくっていくんだといっているわけですが、ここでは3つだけ確認しておきたいと思います。1番目は、学習は実際の共同体への参加であることであって、1人前になること（＝知識や技能を身に付けること）が当然のように考えられているが、知識や技能の習得を含めて自己変容（＝自分が何者かになっていくこと）を学習というふうに考えます。2番目に、正統的周辺参加というように参加は正統的（＝メンバーとして承認されている）であって、そして周辺から十全へ、最初は簡単なことから始めて次第に共同体にとって非常に重要な役割を担うように進んでいくということですね。新参者がだんだん古参者になっていく。そういうプロセスで学習が進むというように考えられています。

今日、この後の議論で最も重要なポイントは、「両義的な周辺性」という、周辺から十全へ進んでいくんですけども、周辺性が両義的（＝相反するような2つの性質を持っている）であることで、学習する力を強くするあるいは弱くする。そして、周辺性にあるということは複数の共同体に参加していくという越境（＝境界を越えていく）ということですね。この周辺性が非常に重要であって、共同体への参加という観点から理論と実践の往還について考えてみたいと思います。まず、教師は学校共同体へ参加します。教師・子ども・保護者・地域、あるいは教育行政に関わる人達がつくり出している学校共同体へ参加していき、初めは新参者（＝実習生・初任者・経験の浅い教員）ではあるが、教師としてどうあればいいのか自分の実践はこれでいいのかと主題化して考えていく。それから次第に、10年・20年・30年と経つ、あるいは指導的立場の教員になっていく。これが十全参加になりますね。こうなると、先ほど述べたように、教育に熟達し円滑な実践をやっていく。その代わりに、自己を非主題化する。実践に対して、常識や当たり前がつくられていく、いわゆる十全参加しているわけですね。その一方で、今度は、

学校共同体へ参加に留まるのではなくて、周縁的な位置に立ち戻って、他の学問共同体への参加が行われる。ここが、教職大学院の役割であり、理論と実践の結節点になっていると考えています。

実践について学んだ教員は熟達していくが、教師の中にはその実践に対する違和感や疑念、場合によっては危機感ももっている。第一にそういうものが湧き上がってくることもある。そこで、理論と実践の結節点である教職大学院で学んだ際には、学校教育の理論を研究する学問共同体への周辺参加が始まるということです。そのため、教職大学院のカリキュラムの中に理論があるわけですから、第二に、学問共同体への参加が少し始まって、3番目に、理論によって問題を明確化していく。ここで、学生の皆さんの様子を見てみると、2つか3つに分かれますね。理論に対して問題を明確にし自分の実践を疑って進んでいく人、それから理論に対して抵抗がある人ですね。ストレートマスターにしる、現職教員にしる、今までの経験からの常識というものを持っているわけで、理論によって自分の実践が揺さぶられると、抵抗し熟達に固執する傾向が見られる。やはり、そこを乗り越えていくことが重要となるわけです。

そして4番目、理論によって自分の実践の再主題化をやっていく。熟達しているけれども、もう一度周辺性を回復して、新しい実践の可能性、新しい自己をつくりあげていく。そちらに自分を投げ入れて、もう一度実践を学び直していく。ここに、「理論と実践の往還の始まり」があるというふうに考えています。そのため、教職大学院のカリキュラムはそれに合わせてつくられていると見ています。目的としては「学び続ける教師」。これは正統的周辺参加でいうところの周辺性の回復、つまり、もう一度初心に戻って学び、今度は実践の見え方が変わるということですね。

このような周辺性の回復が、学び続ける教師を育成していくことになるし、そのためのカリキュラムの原理として教育課題の探究があり、カリキュラムには大きく3つ(目標確認科目、理論に関する科目、実践・実習の科目)があるわけです。評価はどうするのか、今日のように、発表会によって実践的な真正の評価をやっていただく。このような、正統的周辺参加の周辺性の回復を行い、それを何度か繰り返していく中で、教師として大きく成長するし、学び続ける教師になっていくだろうと思います。

【上野】佐長先生、ありがとうございました。では、コースごとの報告に入らせていただきます。岡先生、よろしくお願ひします。

【岡】岡でございます。どうぞよろしくお願ひいたします。私のほうからは授業実践探究コースのこれまでの3年間の学修についてまとめてみたいと思います。本コースはここに挙げておりますように、新しい時代の子供たちに求められる資質・能力を育成するために授業開発を推進することのできる、そういったリーダー教員を要請することが大きなねらいとなっています。そのためのカリキュラムのイメージを図1に示してみました。

本カリキュラムの中核となる科目は、「教育実践課題研究I」と「II」になります。M1のスタートの時にこの課題研究Iで自分自身の課題、すなわち教育上の課題を明確にするところからスタートします。その後、研究・実習計画を立てて研究を進めていくわけですが、課題探究や課題解決を行うためには、多様な基礎理論を学び、それに基づく実践を行い、実践結果を分析・考察する。それから、最終的には報告書を「教育実践課題研究II」で作成し、その結果が本発表会で報告されるということになります。この一連の学修によって、授業実践探究コースが目指す「授業開発を推進できる力」を確実に身に付けることができるといえます。このことは、教育現場において学校の課題を解決できる力、また、より良い充実した教育を創り上げることができる力となり、学校現場に貢献できる人材を養成することにつなが

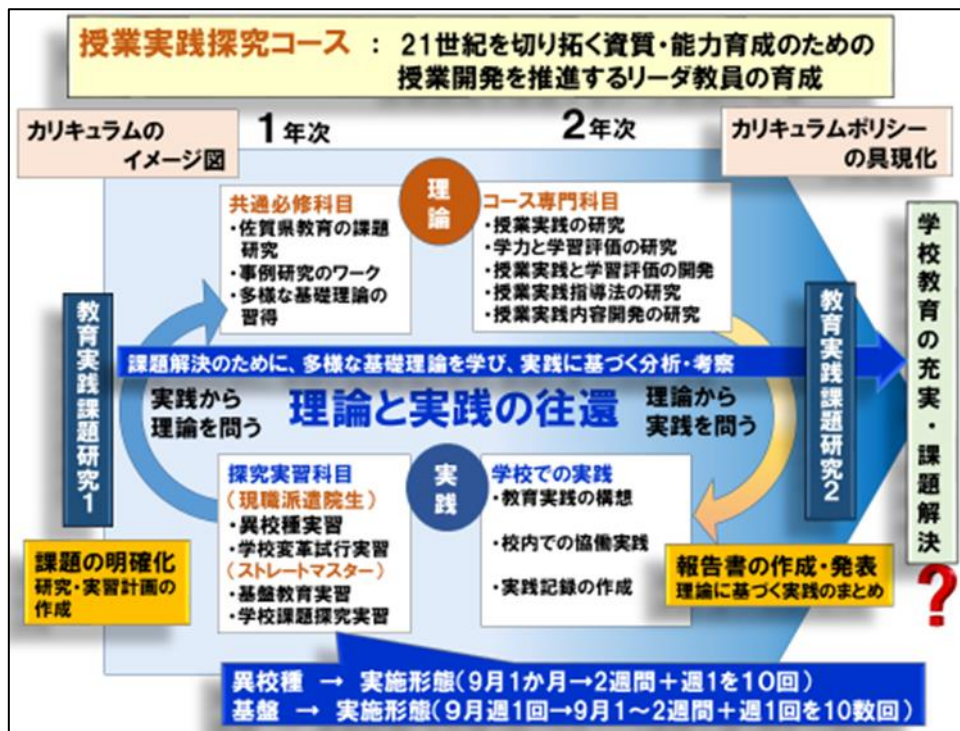


図1 授業実践探究コースのカリキュラムイメージ

っていくと考えています。

さて、このカリキュラムの中で中核となる考え方が、先ほどから出ています「理論と実践の往還」です。「実践から理論を問う」、そして「理論から実践を問う」、その循環を可能にするカリキュラムになっているということです。現職の院生やストレートマスターそれぞれが、探究実習科目を通しながら課題を整理していくわけですが、自分が体験している実践の中から課題が見えてくる。そして、その課題をどのように解決するのか、どう探究するのかという視点から、基礎理論を学んでいくことになると思います。そして、その理論から自分なりの実践が創られていく。さらに、その実践結果を分析することで新たな自分の理論が見えてきたりもする。このような理論と実践の往還の中で学修が進んでいくと思っています。昨年でしたか、ある学会の会長さんがこんなことをおっしゃいました。「授業をやっている、これはすごくうまくいくという授業がある。でもなぜうまくいくのかは未だに分からない。それを明らかにしたい、一般化したい、もっと理論的にとらえられるようにしたいと思っている」。それはまさしく実践から理論を問うということだと思います。このように、授業実践探究コースでは理論と実践の往還を繰り返しながら、最終的にはここ（学校教育の充実、課題解決）に到達したい、という視点でカリキュラムがつけられているということです。

大学院は今年で3年目になりますが、実は、1年目すでにこのカリキュラムに課題が生じました。この探究実習科目です。現職院生は異校種実習に行きますが、実施時期に課題がありました。9月のまるまる一か月間、勤務校種とは違うところで研修を行うわけですが、一か月継続して実習を行うと実践のみになってしまう、つまり、研究を深めたり理論的にとらえたりする時間がつけれない、そのため最終的に理論が後付けになってしまう、というような状況が生まれました。そこで2年目は、異校種実習は9月に2週間ほど行き、その後、週に1日を10回程度繰り返すこととしました。それによって、実践したことを理論的にとらえてみる、という実践と理論のやりとりができるようになったと思っています。それから、ストレートマスターが行った基盤教育実習でも課題がありました。これは9月から1月まで

毎週火曜日に該当校で授業実践を行い、それを理論的にもとらえて研究を深めるというやり方だったのですが、実習の最後になって、院生が何かふつふつとしている、不満げな顔をするわけです。最終的に分かったことは、「5 か月も通ったのに子供たちとちっとも深く関われなかった」、「先生とも関われなかった」、「なんか消化不良だ」という思いをもったということでした。それを受けて、2 年目は9 月の1 ～2 週間まとめて学校に行くようにしました。毎日学校に行くことで、子供たちと親しくなる、先生と仲良くなる、学校体制を理解することができる、また、そのことによって先生方もその院生を受け入れてくれる、そういう状況を生み出すことができました。このような関係をまずは作らないと実践はうまくいかないということが実際にやってみて初めて見えたということです。このことによって、理論と実践の往還という点から見ても、当初よりは非常にうまくいくようになったと思っています。

このように大学院でも試行錯誤を繰り返しながらやってきたということですがけれども、その他に、私自身がおもしろいと思っている授業をいくつかご紹介したいと思います。まずカンファレンスですね。これは探究実習のおりおり月に1 回、院生が全員大学に集まってきて、自分の課題について協議をする時間として設定しているものです。現職院生とストマス、小中高の校種、そして異なる教科という、様々に異なる立場にある、あるいは異なる経験をもつ院生が、自分の課題について皆で協議をするという機会になります。それはまさしく視野を広げて、偏見を超える、それから他者を理解する、異校種・他教科への理解も深まる時間であり、その中に協働的姿勢も生まれてくる時間であるということです。それは学校現場に入った時に、チームで仕事をする、あるいは他の共同体とつなぐ視点、そういうところに繋がっていくと思っています。

次に、M1 の後期にある「授業実践の研究」という科目です。これは付属小・中の先生方にご協力いただいて、ある授業を参観・観察させていただき、その授業を分析して発表するという授業です。今年には附属小学校の道徳を全員で見ました。授業を見る前には、授業者の先生から1 時間、その授業の意図などについて説明をしてもらいます。「なぜこの授業を作ったか」、「子ども達の反応をどのように予想しているか」、「どこがポイントで何を把握してもらいたいか」、「収集して欲しいデータは何か」など、先生の話聞いた後、どのような方法でデータを集めて何を分析するかを検討してもらいます。2 グループに分かれて分析を進めるのですが、その中で子供をどう把握するか、授業をどう観察するか、どのような分析方法を使えば欲しいデータがとれるかなど、そういったことを検討しながら情報を集め、分析を行い、発表をするわけですね。2 グループが検証した結果を発表するわけですがけれども、2 グループの結果を比較すると、分析結果や答えが違ってきたり、見えるものが違ってきたりするわけですね。他グループの話聞きながら、自分たちの検証した結果が妥当性あるものなのか、信頼性の高いものなのかなどを省察できるわけです。このことは、まさしく一人で研究をやる時の足場となる授業ではないかと思っています。

それからもう一つは異校種実習です。これは現職の先生が自分の所属する校種とは異なるところで、探究実習を行うものです。ここに挙げていますように異なる文化の中で授業を行い、自分の授業観を相対化する機会になります。現職院生は、もう 20 年来 1 つの校種で指導をしてきているわけですが、どちらかというとしっかりとした鎧をつけているといってもいいかもしれません。この実習は、これまでの長年の指導や学校体制等について内省する機会となります。異校種のストレスが必ず生じますが、そのストレスの中から、そして考える中から新しい自分が生まれる、新しい視点が生まれるところがこの実習のよさだととらえています。

以上のような授業を積み重ねながら、最終的には本日のこの研究発表会にもってくるということですね。これは昨年度の修了生の発表、テーマですがけれども、いずれも、ある理論とそれに基づく授業実践

の分析・考察により、構成されていることが分かります。このように学修を積み上げながら、大学院では3年間を進んできたということになります。

最後に、この3年間の歩みを考えるということでもとめてみますと、成果としては、やはりこの授業科目の履修システムの中に理論と実践の往還が生まれる状況が作りだされているということです。ただ、現職院生も、ストレートマスターも、そのやり取りの中でそれぞれにストレスを感じている。ストレートマスターは自分の研究したいものと授業力との狭間で非常に悩みます。やりたいと思ったことがやれない。でもそれをやはり何らかの形で乗り越えていくことで、新しい自分が見えてくる、新しい自分にたどり着けるということなのだろうと思っています。

以上、これまでの3年間において授業実践探究コースでどのような学修を行ってきたかを整理させていただきました。以上で私の話を終わらせていただきます。

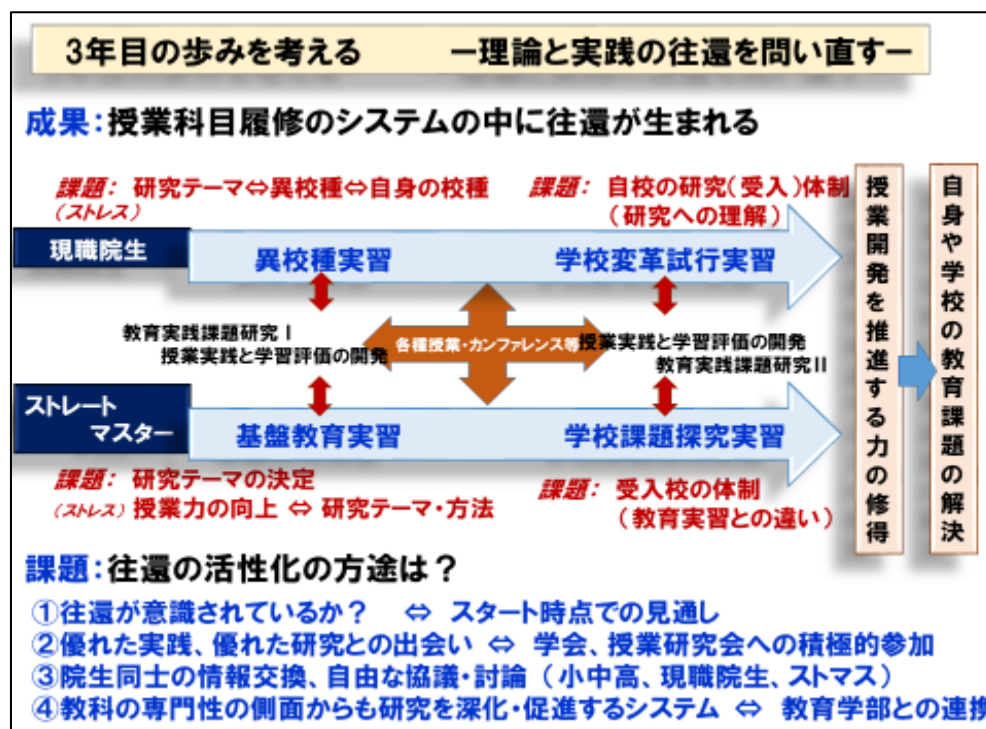


図2 授業実践探究コースの成果と課題

【上野】岡先生、ありがとうございました。では下田先生よろしくお願ひします。

【下田】子ども支援探究コースは、「地域の教育課題としての不登校・いじめ問題への対応、特別支援教育の充実に応じて、生徒指導・教育相談および特別支援教育についての高度の知識・技能を有し、児童生徒の成長へ向けて新たな取組を行うことができる教員の養成」ということをコースの目標としております。今回このスライドを作るにあたって、改めて手引きを見直して、こういうことが書かれているのだと私自身、再認識するところがありました。キーワードとしては、「不登校・いじめ問題・特別支援教育」等が子ども支援探究コースの特に中心的守備範囲になると思われま

子ども支援探究コースの専門科目について、個々のコースの授業科目名ではなく、領域になりますが、子ども支援探究コースの専門科目は、「子ども理解に関するもの」「子ども支援に関するもの」「特別支援教育に関するもの」「生徒指導に関するもの」「教育相談に関するもの」ということで構成をされていま

す。それぞれをコースの教員が担当することになります。ですので、子ども支援コースの特徴としましては、まず教員の方がそれぞれ、専門が違うということになります。私は臨床心理学、教育相談等が専門になりますし、他にも教育心理学の先生がいらっしゃる、特別支援教育、特に発達障害支援の先生いらっしゃる、社会福祉の先生がいらっしゃるということで、それぞれ専門が違うということが、特徴の一つになるかなと思います。

実習のカンファレンスは子ども支援探究コースにもございます。コースによっていろいろ進め方は違うかなと思いますけれども、子ども支援探究コースにおいては月に1回、全教員と全院生が合同で行っております。発表者の実践に関するものを全員で検討するということになっています。当然ながら、発表者の院生は、それぞれ関心があるテーマについての実践を行うところになっているのですけれども、それ以外にも特にコースの特徴として、学校適応上のニーズを抱えているお子さんたち、例えばそれが発達支援的なニーズであるとか、あるいはメンタルヘルス上の何らかのニーズがあるような生徒さんであるとか、そういった個別の対応についても、実習のカンファレンスの中で、どのように学校現場で支援していったらいいかということが、研究テーマに直接かかわるかどうかは別にしても、検討を行っているというのが一つ特徴として挙げられるかと思っております。

子ども支援探究コースの実習について、一般の院生、いわゆるストレートマスターと呼ばれる院生については、これは他のコースのストレートマスターと同じですけれども、2年間、同じ学校で実習をするという形になります。だいたい1年目は、実習先の学校に慣れるということが中心になりますので、行って学習補助を行ったりであるとか、あと、子ども支援コースを選択する一般の院生というのは、自分が教員免許を取る学部生の実習のときなどで、そういった特別支援的なニーズを抱えているような、あるいはなかなか別室登校であったりとか、学校生活に苦戦しているお子さんに出会って、そういった子どもに何かできることはないかという問題意識で、子ども支援コースを選ぶ院生さんが多いかなというところで、実習においても、そういった個別対応の補助なども積極的に取り組んでいる印象を受けております。そういった中で1年目は、自分の関心がある研究テーマについてもいろいろと洗練を図っていくということになります。

そして修士の2年生のときには、自分が絞っていった研究テーマに関する実践を行っているということがあります。あともちろん、現場に出て学校の先生になるということがありますので、授業力そのものを高めていけるといいということで、研究テーマに直接かかわらない場合もありますけれども、通常の授業もさせていただいて、それを教員の方も見に行き、いろいろと指導するという形で、授業力のアップもなるべくできればいいかなというふうに考えてやっているところになります。

現職派遣の院生については、1年目は、適応指導教室に10日間、そして佐賀県の中央児童相談所に10日間、関係機関実習ということでお邪魔しております。適応指導教室に関しては、こちらの佐賀県教育センターの「しいの木」にも今年も2人の院生がお世話になっておりますので、高いところで恐縮ですが、この場を借りて改めてお礼申し上げます。ありがとうございます。

そういった形で、関係機関実習に出向くことによって、学校現場で担任等をされていると、当然どこかで適応指導教室を利用しているお子さんに出会ったり、あるいはそういう話を聞いたりすることはあるのですが、なかなか実際、自分の担当しているクラスのお子さんが利用している場合でないと、実際どうしているのかというのがなかなか知る機会がなかったりしますので、改めて、適応指導教室というところがどういうところで、何を目的にどういう活動をしているのかということを知る機会にもなっていたりしているかと思っております。

あと、県の児童相談所については、児童相談所の一時保護をやるとか、様々なケースの処遇会議にも

ちょっと在籍をさせていただいて、子どもに関する様々な福祉的な支援についての実際について知る、という貴重な経験になっていると思います。昨今、残念ながら児童虐待でニュースになっているのもあるかと思いますが、ああいったものが現場でどういうふうな対応がなされているのか、その実際を知る貴重な経験になっているのかなというふうに感じているところです。

現職派遣院生の2年次は、それぞれの研究テーマに関する実践を行っていきます。それが教育相談、特別支援教育等での支援体制に関する提案であったりとか、職員研修の実践であったり、あるいは個別の支援の実践であったり、それぞれのテーマに応じた実践がなされているというふうな感じになります。

理論と実践の往還に関するところで、少し私なりにちょっと振り返ってみるところですけれども、子どもの支援における理論と実践というところなのですが、私が専門としている臨床心理学、いわゆるカウンセリングは、一対一、あるいは、一対少数の個別の面接、面談を中心になることが多いです。こういった個別の面接とか面談というのは、英語ではインタビューと言います。インタビューという英単語がそもそも、インター／ビューということで、「お互いに見る、間に入れてみる」というふうな意味を含んでいますので、それぞれの方が抱えていらっしゃる困りごと、悩みごとについて、それぞれの観点からいろいろ話し合ったりしていくという作業が行われるかなと思います。

そういった中で、佐長先生のプレゼンテーション中であつたことをお借りすると、例えばこういった中で対象との一体化というようなことも起こってくるのかなというふうに思います。

ただ、こういった教育相談上の話題に上がってくる問題というのは、誰にとって何がどう問題なのかっていうのが意外と分かりにくい、一見常識なようで、それが違う観点から見ると、また違った見え方がする。例えば、親が困っているけど子どもが困っていない、これは一体どっちが問題なのかみたいなことはいくらかでも起こって来たりします。そういった中で、様々な立場によって、思いとか考えとかこうあってほしい願望とかが違ってきますので、様々なものが錯綜しやすい、いう特徴もあつたりします。

ですので、現場の最前線の支援というのはインタビューが良くも悪くも働いて、場合によっては、「木を見て森を見ず」であつたりとか、「灯台下暗し」とか、いうふうな形で視野が近視眼的になりがちな危険性をはらんでいたりします。そういった中で、我々の領域では、そういったことが起こりやすいということもあつて、支援の指導助言を定期的にする、ということが大事になってきます。これを我々の領域では、スーパービジョンと言ったりします。スーパービジョンというのが英単語ですごく分かりやすくいいなと思うのですが、スーパー／ビジョンということで、高いところが俯瞰して学べる、スーパーというのが“超える”という意味ですので、ちょっと高いところから振り返ってみるといいですか、俯瞰して見る、というニュアンスになるかと思いますが、もともとは、ラテン語のルックオーバーというところから来ているそうなのですが、ですので、個別の面談のところ実践で、指導助言、そういった、こう俯瞰して見るためにはですね、高いところに登るための土台ないし、はしごみたいなものが必要になるかと思いますが、そういったものが理論に該当するのかっていうのが私なりに理解しているところです。

我々の領域では、「理論が人を治すわけではない」ということがよく言われています。そういったもので、いろいろな表現で、いろいろなベテランの方が表現されているのですが、例えば「理論は地図である」。これは、理論は現在地の確認や道標としては非常に必要である、と。何が問題でこれがどこにどう向かっているのかっていうのを整理するためには理論がすごく大事。ただし、一方で、理論は地図であるが現地ではない、つまり現地そのままではないですし、現地の変化によって、地図は書き換えられる必要が当然出てくる、という考え方です。そういった形で、理論は大事にしながらも、ある程度の距離感を保つ必要があるのかなと。そうですね。あるいは、理論は武術というところの型というようなもの

である、ということですね。

他の例えで、私はちょっと武術の心得がないのであれなのですけれども、空手とか剣道とか、決まった型というのがある。型を練習することによって、自分の体の動きの癖に気付くことができる。こういう動きはスムーズにいくけど、こういう動きは苦手だ、とか。そういった、自分の体の動きの癖に気付ける、というところで、やはり理論というのは、そういった型と同じだと。なので、型から入って入っていくことがすごく大事だし、ただし、型ばかり身につけても、実際の実践がうまくなるわけじゃない、つまり、型がうまくなくても試合に勝てるとは限らないということになりますので、型から入って、型から出ていくことが大事、ということになってきます。そういったところで、理論は武道の型、なんていう言われ方をしています。

一つだけ写真をご紹介します。子ども支援コースの演習科目の写真をご本人たちの了承を得て紹介します。特別支援教育の授業でしたけれども、特別支援教育のいろいろ、理論的な勉強に関するものですね、こちらの机で、ざっとまとめた後に、特別支援教育的なニーズがあるお子さんに、どんな対応をしていくかというのをこちらの方で実践するロールプレイしていくというふうな授業の一つのコマとなります。ロールプレイをすることで、自分がどういうところが得意で、どういうところが苦手とか、どういう言葉かけがしやすくて、しにくくて、ということに気づきやすくなるということがあります。ただ、当然ながら、ロールプレイと全く同じ現場というのはいないわけですので、そこでは応用力とかも必要になってくるかなと思います。

そういったところで、理論と実践の関係性というのが、非常に、先ほどの佐長先生の表現で緊張関係というのがあって、なるほどなって改めて私も理解したところですけど、こういったところがあるかなと思います。

時間がオーバーしてしまいましたが、子ども支援探究コースでは、こういったところで、院生がそれぞれの研究テーマで、いろいろと実践をされているところになります。全体的な子ども支援コースの成果と課題について、私なりに考えたとき、まず、当然ながら、現場のニーズに沿った実践がなされているところが一つの成果としてある、「こういう取り組みをしてもらってよかった」ところがですね、学校現場の先生方からいただいている声ということでもあります。

これと表皮一体の関係になるのですが、課題としては、ニーズとのマッチングというのが大事な観点になってきます。学校が違えば、ニーズも、子ども支援の領域に関するニーズも変わってきていますし、個々の先生が感じているニーズと、学校組織としてのニーズが必ずしも一致しないというところがあるかもしれません。そういった、マッチングの問題が出てくるかなと思っております。

あと、ストレートマスターの院生については、なかなか、こういった特別支援教育領域とか教育相談領域の経験が非常に少ない中でありますので、自分が学部生のときに感じた違和感を研究テーマとして設定したいとして、その学校現場のニーズと合致しているものかというのを洗練させるというプロセスも含めて、まずニーズを把握する、というところでもすごく考えざるを得ないところがあるかなというふうに思います。

また子ども支援探究コースにおいては、そういった意味での様々な個々の、支援の考え方や実践についてですね、様々なスキルアップを図っているところで、それが一つ成果としていえるところかなと思っっているのですけれども、これに関する課題としては、持続可能性ということも出てきます。気合を入れてやったら、その年は、例えば支援体制の変化とかについても、提案ができるところがあるのですけれども、ありがちなのが、次の年にそれが続かないってということもあったりします。

こういった、いわゆるコストパフォーマンスの観点を踏まえて、せっかくなので、それが

いかに続けられるか、というところも、今後考えていく必要があるかなというところですよ。

スクラップアンドビルド、つまりその学びにおいて、そういった院生の中でスクラップ、自分の知識経験が一回リセット、リセットまでいかないですけど、少し揺さぶられて新たな知識、体験が身につけていくかどうかということ、教える側の我々教員においても、そういった意味で理論は常に更新されていく必要がありますので、我々自身もスクラップアンドビルドが生じているか、当然それは理論においてもそうなのですが、変化が生じているかどうかというのは、今後課題といたしますか、考えていく必要があるかなというところで思っているところであります。

時間をオーバーしてしまいました、子ども支援探究コースの紹介は以上であります。どうもありがとうございました。

【上野】下田先生、ありがとうございました。では、中島先生、よろしくお願いします。

【中島】教育経営探究コースの中島です。よろしくお願いします。教職大学院は平成20年から創設されるのですが、25年にさらに各都道府県に一つ作りなさいということで、佐賀大学も28年に作るということになりました。佐賀大学の教職大学院の目的はここに挙げていますように、現職教員は地域・学校における指導的役割、ストレートマスターは、実践的指導力を備えた将来性のある即戦力となりうる教員を養成する。カリキュラムとしては先ほども、出ていますように、「理論と実践の往還」及び課題探究を通して理論及び事例研究を学んでいく。理論を学び、そして教育実習等によって実践も学ぶといった形になっているわけです。教育経営コースについては、現職教員等の院生になるわけですが、実は教育経営探究コースは学校経営というのがテーマになりますので、どうしてもストレートマスターはなかなかそぐわない。大学院を卒業してそのまま管理職になるわけにはいかないで、今現在3年間は現職教員しかいない形になっています。実は1期生のそれぞれの研究のテーマですが、見てもらうとわかるように「連携・協働」とか「協働文化」「学校づくり」「学校改善」「地域連携」といったテーマでそれぞれ研究がなされています。難しいのは、学校を変えるということに関して、一人のいわば平の教員ですら、この人たちが学校を変えるというのは極めて難しいわけです。そうするとどのように進めていくかということ、校長と話をして、校長の了解を得たうえでないとこのようなことはできないというところが一番難しいところである。校長を動かさないといけない。場合によっては途中で校長が変わるということもあるので1年目でしっかり作っていた計画を2年目、場合によっては計画をはじめからやり直すということも出てくるわけです。2年目に学校現場に戻ってこの研究を進めていくわけですが、1年目にやはり学校に常に行ってどんな変革、実習をやるのかについて校長等としっかり協議をするというのが一番大変なところになります。

実は、現職の先生たちが教職大学院に入って戸惑うことは、目の前に子どもがいないということですね。1年目は特に。それから学ぶ内容が多岐にわたっている。これはどういうことかということ3つのコースがあるといいましたけど、それぞれのコースの内容を勉強するわけです。教員養成系の大学を卒業した人たちは一応いろいろな理論を勉強してくるわけですが、専門職の教科教育を主体にした勉強しかしていない人たちは、かなり戸惑うわけです。用語から知らない。ひどい人は1年目は用語だけでパニックになる。特に高校の先生たち。そういうところがあります。それから、他校種の教員の考え方の違い。小学校の先生たち、中学校の先生たち、高校の先生たち、全然違う教員文化の中で生活をしているので、それがまた面白いと言えば面白い。新たな発見がある。そしてもう一つはストレートマスターがいる。授業の内容によってはストレートマスターと一緒に勉強しますから、現職とストレートマスタ

一が隣同士になるような席組で授業を受けてもらっていますから、考え方の違いを目の当たりにすると。

要するに、視点の大きな違いは、子ども、今まで現場にいたときには、子どもを中心に見ていたのが、大人の視点に変えざるを得ない。回りりは、教員であったり、保護者であったり、地域であったり、そういう風に変えざるを得ない。そこが変わってくるわけです。

実は、学校現場にいると見えないもの、学校から教職大学院に入ってきたときに、分かりませんでしたというのが結構あるのですが、一番多いのは、理論的な部分。目の前に子どもたちがいるので結局理論を勉強する暇がないというとあれですけどいろんな子どもたちがいるのでその部分が見えない。今度は学校現場にいないと見えない部分。これはまさに実践なのです。実践部分は学校現場にいないと見えない。ということになります。通常、先ほど佐長先生の話にもありましたが、ニュートン力学は条件設定をするわけですね。時間は一定の速さで進行する。しかも、地球上でという条件をつけてニュートン力学を創り上げるわけですね。そうするとそこには普遍性が出てくる。それが理論ということになる。だけど、宇宙空間や分子、電子そういうものの動きまで入れようとするニュートン力学では説明できないということになるわけです。だけど、条件が同じであれば、生起する事象は予測可能にならなければならない。教育の話のところによく出てくるピグマリオン効果というのがあります。知能検査をして、その結果この子らは知能がいいよと言われた担任はその子どもたちに期待をもって接するので成績が伸びたというわけですが、実は、同じように実験をやると再現性はないということで、ピグマリオン効果というのは実際は怪しいという話になったわけです。だから、生起する事象は必ず予測可能にならなければならないというのが理論になります。そうすると要するに理論から実践を行う、実践から理論を導くということですが、実践から理論を導くことは学校現場では難しい。なぜか。結局仮定ができないわけです。先ほどの条件設定をこうであるとか、単純化することが極めて難しい。いろんな子どもたちがいてそういう中から理論を導き出すことは極めて難しいということです。そこで結局最終的に何をしないといけないのか、実践を理論で説明が極めて難しい。ここの部分だと条件を付ければ理論で説明ができるけれど、子どもたちはいろんな考え方や行動がありますね。年によっても違うし、学年によっても違うし、個々人によっても違う。それをいっぺんに見ていて理論を勉強するんだけど頭の中がパニックになる。というようなことが起こってくる。現職の先生方もそういう風に言うわけです。どこにどう使っているのかというわけですが、結局は理論を実践に活かしてここの部分はこの理論で説明できるのではないだろうか。いう風に理論を実践に活かしていく。ということが「理論と実践の往還」ではないかなと私なりに、私は実務家の教員で現場に長くおりましたので、そういうことで現職の先生と話をしながらこの「理論と実践の往還」というものを考えたところでした。

【上野】ここから質疑応答に入ります。佐長先生からは、理論と実践の往還について原理的なご報告をいただきました。そして3人の先生方からは、それぞれのコースのこの3年間の歩みを踏まえながら、理論と実践の往還について、どういうことを見出すことができたろうかという観点から、お話をいただきました。

それでは今日は、修了生の方もいらしておられますし、他県の大学からもお越しいただいているとうかがっておりますので、今の4人のご報告について自由に質問を出していただければと思いますが、いかがでございましょうか。

なかなか口火を切るのは難しいかなと思いますけれども、少しお考えいただいている間に、私の方から質問をさせていただきます。まず佐長先生ですが、先ほどのお話が非常に興味深いご報告だったので、例えばこれまでの教育学研究科と今回の教職大学院というのは、根本的に構成されている原理が

違うと思うのですね。そのあたりをもう少し紹介していただければと思います。

【佐長】以前、教育学研究科で修士課程でした。教育学研究科から教職大学院、専門職学位課程です。教育学修士から教職修士に変わったのですが。実は私自身は、教育学研究科のときと今と、自分が学生に対して接している姿勢、それから教育の内容というのはあまり変わっていないのですよね。教育学研究科のときから、やっぱり実践は大切だと。

むしろその、教職大学院をつくる時に、理論と実践の往還ということは、それはもう私は今まで自分もやってきたことだし、そういう教育指導を行ってきたので、非常にスムーズに自分自身では移ることができた、ということがあります。

学校教育を考えていく上で、理論だけでもだめだし、実践だけでもだめと。先ほども言いましたように、常に実践を作り替えていく、あるいは教師としての自分自身を見直し、新しい教師としての自分に、こう自己に投げ入れていくということですね。そういうことが、理論を契機に、理論について知ることによって、可能になってくる、そういうことだと思います。まだしゃべっていいですか。

皆さんにぜひ知っておいてほしいことは、理論は、実は、実践者にとっては不愉快なものです。自分自身が揺さぶられますから。不愉快で抵抗が起きるのが、むしろ今まで、学生の様子を見ていてそれが当たり前。そこを超えていったときに、教師としてもより大きな成長が得られるだろうというふうに思っています。だから、理論を学んでいて、ああこういう理論ね、自分の実践があって、これはもう自分の実践は変わらないですよ。

私の授業の中で、たまにそういう表情をしている人もいますけれどね。そんなこと、そんなものに実践いるのっていう、こういう理論が自分自身を揺さぶり、自分の実践をもう1回見直して、新たにスタートを切っていこうというような、実践としての新しいチャンスを開いていくという、そういう理論を学んでいくということで、教育学研究科の場合は、教科内容を非常に重視していたのですが、私はむしろ実践を重視して、新たに実践を作り出していく、そういう場として教職大学院のカリキュラム、教育を考えていくわけだと思っています。

【上野】それでは、岡先生にお尋ねします。ストレートマスターと現職教員のニーズというものは随分違うと思うのです。それでお尋ねしたい点は、学生のニーズからすると、やはり初発のモチベーションというのは、授業をもっとうまくやりたい、自分のスキルアップを図っていききたい、というところからスタートしていくのだと思います。しかし、ここに理論をかませていくとなると、ストレートマスターは、まだ経験値はほとんどないわけですから、大学の先生方が教えられることが、ずっと入っていくかもしれません。けれども先ほど岡先生のお話の中で、「鎧をまとったような」というようなご紹介ありましたけれども、その鎧を落としていくのは、大変なことではないかなと思うのですが、いかがでしょうか。

【岡】そうですね、実は、私自身も現場出身の実務家ですから、すごくストレスを感じた1人ですね。理論を聞きつつですね、特に佐長先生の授業を聞きつつ、あの違うのではないかなっていうのを、すごく思った1年目でした。

でも、その中で、やっぱり自分自身が変わっていく部分が見えてくる。そこにやっぱり新しい自分の発見もあるし、自分が考えていたことが、また新たに更新されていく、そして、自分のあり方をもう少し整理する、他者との関わりも見えてくる、そういう中で、なかなか面白いなというふうに思うように

なりました。現職は多分、私と同じような体験をしているのだろーと思います。ストレスというふうな話をさせていただきましたが、異校種実習などで文化に触れる、また、大学の中でそういった理論に触れる、そして、でも、現場の子どもたちの学力って、そこじゃないよね、とか、いろいろな思いを、評価ってこうやっているよね、という、そういう思いを、ぜひ授業の中でぶつけていくことで、やっぱり、黙らないで出していくことで、もしかしたら、もっともっと活性化していくのではないかなというふうに感じています。

【上野】では、下田先生にお尋ねしたいと思います。インタビューとかスーパービジョンの話がありまして、なるほどと思って聞かせていただきました。また、「理論は地図」「理論は武術の型のようなもの」だというお話がございました。そのときに、今、学校では「チーム学校」ということが言われますし、先ほど中島先生のご報告の中でもですね、協働文化の話が出てまいりました。やはり、子ども支援の領域の中では、すでにそれを先行してやっている、もしくはそれをしないと近視眼的に陥りがちになっていく、それを打破するためにはやはり、重層的な構造というものを作ってこられたという経過があるという理解でよろしいでしょうか。

【下田】そうですね。上野先生からのご意見で、確かにそういう側面もあるかなというふうに感じたところです。特に、現職院生の研究テーマは大きく二つあるかなと思います。一人の方が二つの取り組みを行っていることが多くて、一つは学校組織における教育相談とか特別支援教育に関係する支援体制についての様々な提案。これも一つの大きなマクロな視点のレベルでの働きかけになるかなと思います。それとまた並行して、個々の子どもさんに対する支援、関わり、個別の教育相談などのミクロな点、特別支援教育的な対応といったものもありますので、そういった意味では、子ども支援探究コースの特に現職院生の研究テーマというのは、結果としてそういった多層性を帯びてくる、ところが多いかなというふうに感じているところです。

【上野】従って多層性を帯びてくるので、やはり個々の判断には委ねないということなのですか。

【下田】個々というのは、個々の院生ということですか。

【上野】学生でもそうですし、カウンセラーでもそうなのですけれども。

【下田】そうですね。個々の判断に任せない、というのが難しいところではあるのですけれども、基本的にこれが正解というところがなかなか、一つの正解というふうに落とし込めない領域というところもあるかなと思いますので、様々な観点が必要であるかなあというふうな気がしております。

それで、子ども支援探究コースでの実習のカンファレンスでは、そういう意味でいくと、現場から考えて様々な視点を養う、いうところがあるかと思っておりますので、我々の領域でよくあげられるのが、宮本武蔵がいうところの「観の目／見の目」であったりとか、岡目八目のような視点といったところですね。様々な視点を養う、ちょっと距離を取りながら冷静にみつめてみる視点というところで、養っていくというところが一つあるのかなというふうに思います。

【上野】中島先生にお尋ねですが、自然科学とやっぱり社会科学はちょっと違うかなと思うところがあ

りまして、先生のご指摘の中では、条件が同じであれば、生起する事象については、予測可能であるというお話がありました。これを学校現場に即して考えてみたときに、その条件が同じというのはどういうことなのだろうか、またどういったことを予測していったらいいのだろうかということについて、先生のお考えがあれば、教えていただければと思います。

【中島】先ほど十分な説明ができなかったかもわかりませんが、要するに、学校現場にいと、いろいろな子どもたちがいと。そうすると、その全体、要するに、森を見てははですね、理論はなかなか導けないだろう、と。だから、条件をそろえて、子どもたちが、例えば先生の言うことを聞く動機づけ、聞く動機づけをきちっと整えたら、次の段階では、こういうしゃべり方とか、動作をしているとちゃんと受け取ることができる、とか。だから、もっと単純化すれば、例えば、予備校の先生は、子どもたちが、大学入試のために、一点でも点数を取りたいという、みんな目的が同じ人たちがそろっていると。そういう中であって、先生が発言する内容は受け入れていけると。しかしながら、通常の学校現場ではそうはいかないわけですね。だけど、それをどうしたら条件を揃えることができるかということを一生涯懸命考えていかなければいけないということです。そういうふうにして、条件設定をすることができれば、要するに、すっきりした理論というか、どうしたらいいかという方法論が出てくるのではないかというふうに思います。

【上野】先に私の方で質問させていただきましたけれども、今日の参加者の皆さんからご意見・ご質問をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【田代中学校 江上先生】教育経営探究コースには、ストレートマスターの学生がいらっしやらないということだったので、学校現場で働いていて、もっと全体を見ることのできる教員が、年齢や経験とかに限らずもっと増えていけばいいなと思っているのですが。他にも保護者さんとか、地域からの視点もどんどん、学校に入ってきたほうがいいと思っているのですが。そういうことを考えたら、教育経営のほうにもストレートマスターとか、いろんな人が入ったほうがいいのではないかと思ったのですが。そのあたり、今後の方針とかありましたら教えてください。

【中島】教育経営探究コースは、ストレートマスターを入学させないということではないです。だけど、そういう希望する人とお話をしていくと、どうしても、もっとその前に身につけなければならないことがあるということで、結局は、授業実践とか、そういうところへ入っていきます。しかしながら、教育経営的な授業もちゃんと受けることができるので、そういう視点をもって、学校現場に行く可能性は高いです。そういうところで実現しているというふうにご理解いただければと思います。

【上野】残り時間が少なくなってきましたので、私の方から発言を求めさせていただきますと思います。今日は修了生の方が来ておられます。実際に2年間在籍をしてみて、この「理論と実践の往還」というのは、どういった意味で効果的だったのだろうか、また、今の職務に役に立っているところはどこだろうか、という点についてご意見いただきたいと思いますが。

【鏡山小学校 井手先生】今、鏡山小学校で6年担任をしております。先ほどから「理論と実践の往還」ということで、そうだなあといいながら聞かせていただきました。私たちは1年目だったので、いろん

な悩みやしがらみとかあって、授業の流れとかもいろいろ先生たちにご相談させていただいたことが多かったのですが、報告を聞いて、いろいろ改善されているなど感じたことが一つです。あと、2年間自分が大学で授業を受けて、研究を進めてきて一番思ったのが、まず、子どもの見方がちょっと変わったかなと思います。あと、授業に対する考え方も変わったので、大学院のほうで研究をさせていただいたことも実践はしているのですが、それ以外でまた新しく、実践をはじめたこともあって。やっぱり先ほどから言われているように、新しい自分を発見して、新しい視点で子どもたちと向き合っているなどというのを強く感じます。

【佐賀商業高校 中西先生】入学して最初に、ストレートマスターと他のコースの院生と一緒に授業を受けて感じた違和感は、やっぱり高校は特別支援にちょっと疎い部分があるというのはとても感じました。教育経営コースは現職ばかりで、それぞれが教職経験年数 25 年前後の歩みがありますので、当然、これまでの歩みの違いという部分で、校種の違いとか、そういった部分は感じながらも、小中学校というのは、私も経験する機会がなかなかないので、そういった意味では視野を広げさせていただきました。

一番思ったのが、今まで 25 年くらいの教職経験の中でやってきた実践を、こういう巻き込み方をしたから、あのときはうまくいったのかなとか、このときこういう配慮が足りなかったから不満が出たのかなとか、そういった振り返りをすることができるようになったと思っております。

今現在、4月から主幹教諭として勤務をしておりますが、やはり視点が、子どもたちにももちろん授業もしますけれども、先生方をどうやってうまくこう巻き込みながら、協力してもらえばいいかなとかいうような、そういった視点が持てるようになったと思います。

やっぱり2年間の理論と実践の往還というところで、自分自身にも、先を見通して考えたりとか、何か今までの自分よりも動揺しない自分と言っては変ですけども、そういった部分が出てきて、やはり見方とか見え方の景色が少し違ってきたような実感をしております。

【熊本大学 長浜先生】熊本大学教職大学院で実務家教員をしております。実は、昨年度から立ち上がりまして、今年2年目で、最初の卒業生を今年3月に出す、ということです。やはり教職大学院がスタートして、どのように研究者教員、それから実務家教員、協働でよい院にするかということに試行錯誤をして参りました。今日、ご発表いただいて、大変勉強になることが多く、今後参考にさせていただきたいと思っております。先ほどから、「理論と実践の往還」というお話がありまして、いつも感じていることは、現職院生とストレートマスターですね、「理論と実践の往還」といったときにレベルも違うということがあるのかなと。それから、また私、講義があるときに、研究者教員と実務家教員とが共同でやっていますけれども、そういう中で「理論と実践の往還」という視点で、取り組める部分がかかなりあるのかなと思ってずっとやってきたのですね。

佐賀大学におかれましては、そういうところの授業の在り方とか、それから、ストレートマスターと現職院生の「理論と実践の往還」の深まりについては、何か配慮されている部分がありましたら教えていただけないでしょうか。

【福岡教育大学 福井先生】私は、福岡教育大学に行っておりますけれども、実は佐賀から通っております。私は教育センターにもおりましたし、また春日北小学校の校長のときは、岡先生が教育センターの所長でいらっしゃいましたので、いろいろとお世話になりました。今日はそういう意味で、私は佐賀の教育の力を感じたいという想いで来ております。実は、教職大学院の研究発表会が12月にありまし

て、そのときに佐長先生の佐賀大学の発表をお伺いしておりましたので、改めて今日、お話を伺いながら、この佐賀大学教職大学院のよさを実感して帰りたい、いろんなことを吸収して帰りたいという想いで今日来ております。また、明日からは、長崎大学、岡山大学と行かせていただくのですか、いろんな大学を見ることで、私は勉強したいと思っております。まだ、福岡教育大学に行きまして1年半、2年くらいしか経っておりません。そんな中で今はまだまだ、初心者つもりでやっておりますので、今日はお世話になりますが、よろしく願いいたします。

【上野】まだまだ質問もおありかと思えますけれども、このあたりで最後に登壇者の先生方から、質問に対して一言コメント、回答をいただければと思います。

【岡】授業実践探究コースといいますか、課題について最後残しておりましたので、少し話をさせていただきたいと思えます。

実は「理論と実践の往還」という矢印をいくつか、最後のシートに書いていたと思うのですが、実はこの矢印をもっと太く大きくしたいという思いがあります。そのためには、この「往還」を学生が意識しているか、スタート時点での見通し、2年間の学びの見通し、その「往還」への見通し、そういった見通しができる何か仕掛けをやはりしなければいけないのではないかと感じているところです。

それから、すぐれた実践、すぐれた研究との出会いというのが、やっぱり現場の教員になるためには非常に重要であり、こういうふうになりたいというすぐれた先生を見る、すぐれた授業実践を見ることが大事だなと思っているので、学会とか授業研究会に積極的に参加する、そういう機会がとれたらいいなと思えます。

あと二つぐらいあるのですが、すみません。院生同士の情報交換ですね、自由な討議討論ができる、そういう場をぜひ、院生の主体性の中で作れたらなあと思っているのです。小中高の先生がいて、現職院生とストレートマスターがいて、授業の中で交流するだけではなくて、やっぱり院生室が一部屋ありますので、そこで何か熱くなる議論ができるような、そういうお互いの関係性ができるといいなと思っています。

もう一つ、私が一番気になっているのが、授業実践探究コースは5人の教員で担当しています。教科を全部、例えば10教科あるとしたら、教科を全部網羅できないというところがあります。教科の専門性の側面から見ると、研究を深化促進するシステムとして、教育学部との連携をこれから、何かの形で進めていけたらいいなと思っております。

【下田】現職院生とストレートマスターと一緒に学ぶ、ということについては、特にメリットの面で、いろいろと考えてみたのですけれども、まず、ストレートマスターについては、先ほど私のプレゼンテーションにも少しありましたが、そもそも、この特別支援領域だとか教育相談教育については、学部の教育実習では、なかなか学べないところであったり、学部のカリキュラムではどうしても、メインストリームではないところであったりしますので、それについて学べる、特にその我々教員だけではなくて、現職の先生方の様々な経験、そこで感じた様々な困難、難しさを含めて、実感として学べるということも大きいのかなと思っております。

一方、現職の院生に関しましては、これは私が拝見した想像の域を出ないかもしれませんが、噛み砕くという、例えば、ストレートマスターに自分の経験などを大学院で学んだことを通じて含めて、噛み砕いて説明する、ということが必要になってくるかなと思うのですけれども。その噛み砕く、とい

う作業の中で、自分の経験を1回、振り返るとかですね、噛み砕きながら考える、というところがきつと起こっているのではないかなと思っております。そういうところで、ただ自分の経験をストレートマスターに伝えるだけではなく、自分が今まで学んだ経験してきたことが一体どういうことだったのかということ、改めて振り返る機会にもなっているのかなという意味で、両者が学ぶメリットとしては、そういったそれぞれの関係があるのかなと考えております。

カリキュラムの面についても、今後もそこら辺をどんどん進化できるように、できるようなカリキュラムをまた提案できたらいいなというふうに感じているところです。

【中島】先ほども言いましたように、実務家教員から見て、学生が院生室で、みんなどんな話をしているかなど。遊びの話ばかりではなくて。ときどき、賑やかに声が聞こえますけれども。そうではなくて、実習に学校に行ったけど、こういう部分はどうしたらいいのかなとか。学校現場でもですね、先生たちは授業が終わったら、小学校ではなかなかできないのですが、中学校、高校は職員室に帰ってくると、「今日〇〇君は、ちょっと具合が悪そうだったよ」とか、「何か困ったこと、先生知りませんか」とか、そういう話題をするわけですよ。そういう中で、自分がどういうふうに、次にしていっていいかというようなことを分かる、というかな。そういう部分があるので、ぜひそういうふうにしてもらうと、ストレートマスターと現職教員と一緒にいる意味が大きくなるし、なお一層、それから小中高、全ての校種がそろっているという意味が大きくなるかなと思っております。

基本は、実務家教員と研究者教員と一緒に授業をするという形をとっておりますし、教育経営コースでは、研究者教員が2人、実務家が2人の4人の教員と一緒にコース生全員を指導するという場を作って指導をしているところです。

【佐長】最後に二つ、お話ししたいと思います。一つは、カリキュラムとは何か、ということで、「理論と実践の往還」のカリキュラムだということを言っていますけれども、2年間のこの大学院の学習ですよ。その中で、授業科目、理論的な科目と実践的な科目、実習は10単位ありますけれども、ここでも、ミクロなカリキュラムだというふうに言っていると思うのですが、この大学院2年間の中で行う「理論と実践の往還」と、それからもう一つやっぱりカリキュラムは、教師は教師である限り、生涯にわたってやっぱり学び続けるということが進めば、もっと長期のマクロな、そして学校も超えて、社会の中で学び続けていくような、そういうもう一つマクロなレベルでのカリキュラム、そこにおける「理論と実践の往還」ということもやっぱり考えないといけない。そういうミクロな視点とマクロな視点で、自らが学んでいく、理論と実践の往還のカリキュラムを作り出していくということが、修了生の皆さんに期待したいことだということです。

もう一つ申し上げておきたいことは、「理論と実践の往還」の関係の中で、少し補足しておきたいのですが、理論で実践をつくることはできないということで、先ほどから繰り返し言っているように、理論とは概念であって、見方なのですね。見方を変えることによって、自らが新しい実践に一步踏み出すという、理論の役割はやっぱりそこまでですよ。

だって、授業実践探究コースと言っても、授業の理論だけ知っても、授業はできませんよ。やっぱり、子どものことを知らなきゃいけないし、それから、教育内容、それぞれの教科の内容のことも知らないといけない。だから実践というのは、理論よりもずっと幅広くて、しかしその実践に熟達していく中で、どこかでやっぱり立ち止まって自分の実践をもう一度見直す。それが理論の役割であって、一つの理論を知ったときに、その見方が非常に強力なものであれば、ただ一つの理論でも実践が大きく変わってい

くことはあり得るだろうと思いますけれども、理論を知ったからといって実践がすぐ作れるわけではない。新しい実践を作るには、理論によって見方を変えて自分自身を作り替えていくということが必要であって、そういうことを生涯にわたって、先ほどマクロなカリキュラムというのを言いましたけれども、生涯にわたって何度か繰り返していく中で、教師として大きな成長を果たしていくことができるだろうと、そんなふうに考えていますので。これからも、修了生の皆さんをはじめ、今の在学生もしっかり学んでいただきたいというふうに思います。

【上野】日頃、私どもは授業と一緒にやっているのですけれども、それぞれの先生方が何を考えておられるかというのは、お互いにあまり知りません。そういう意味では、今日は非常に私ども教員サイドも勉強になったと思います。

先ほどの報告の中で、下田先生から「理論は地図だ」という話がありました。一番最初に佐長先生に私がお尋ねしたのは、教育学研究科の時代は、どんな授業をしていたのかということを考えてみたのですけれども、そのときには、院生の皆さんに対して、地図を描いて見せる、あなたが求めている地図というのは、こんな地図なんだよと。その地図を大きく描いてみせてですね、あなたが立っているところはどこかというところを説明していたような気がします。ところが、教職大学院に来て変わったなと自分で思いますのは、あなたは今、どこに立っていると思っているの、そしてあなたはどこに行きたいと思っているのと。その行きたいところに行けるような地図を探してみよう、というような授業に変わっていったかなと思います。一緒にそのルートを発見していく、それが私にとってみると、理論と実践の往還というふうにか、共同作業というのか、そういった営みになっているような気がしながら各先生方の報告を聞かせていただきました。

今回は、3年間の歩みをまとめてみようということで企画をさせていただきました。これからは、佐賀県の教育課題に対して、教職大学院だけではなくて、研究科長からもご紹介もあるかと思いますが、大学院、学部と一体になって、佐賀県の教育課題について議論し深めていく、というような機会を継続的につくっていきたい、そのスタートをきることができたかなと思っているところでございます。

今日のご参加いただきありがとうございますございました。

(2020年1月31日 受理)